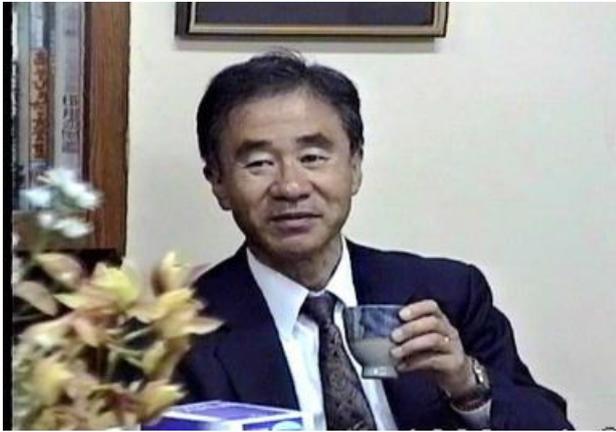


「もとはこちら」のお話し

No. 58 今月のテーマ 駕籠かごに乗る人 担かつぐ人



もとこちら 極めきったら 菩薩なり

けんじ

「駕籠かごに乗る人 担かつぐ人、そのまた草鞋わらじを作る人」という言葉を初めて聞いたのは、平井先生の勉強会でした。駕籠などといっても、今では、時たま時代劇の中で目にするか、或いはどこかの観光地などで見かける程度のもですが、初めてその言葉を耳にした時は、なるほど、と感心したものです。

この言葉の本来の意味は、世の中には色々な立場があり、貧富の差があり、階級があるが、それらによって、世の中は上手く回るようになっていて、という事のようです。しかし平井先生は本来のそういう意味とはまた異なる別の角度から、次のような話をして下さいました。

世の中には色々な立場の人がいます。例えば駕籠に乗る人もいれば、その駕籠を担いで、言われたところまでヘイサツ、ホイサツと走りながらお客さんを運んでいく、いわゆる駕籠かきといわれる人もいます。そしてその駕籠かきが履く草鞋を作る人もいますが、自分がどの様な立場になったとしても、自分は自分に与えられた立場になりきって、持ち場、持ち場で、最高の自分を表現できるようにしなければならぬという事です。

与えられた役割や立場になりきってこそ、自分が生かされ、磨かれる道が開けてくるというのです。

最高の草鞋屋さんとは、

例えば自分が駕籠に乗るお客さんの立場になったとします。その時は、最高のお客さんを目指し、そして駕籠かきの仕事を与えられた時には、その駕籠かきの役になりきって、最高の駕籠かきを目指す事が大事であるという事です。そしてまた、駕籠かきに履いてもらう草鞋を作る立場の人になった時には、日々精進努力して、最高の草鞋作りの職人になれるというのです。

さて、では素晴らしい草鞋とは、どういう草鞋をさしているのでしょうか。

多分それは、履いていても履いている事を感じさせないくらいに履き心地が良く、しかも丈夫で長持ちする草鞋だと思います。しかも、駕籠屋さんの商売を圧迫するような、高い値段ではないという事も大事なことです。

北原ゆり筆

そこで草鞋屋さんとしては、そういう素晴らしい草鞋を作るために、日々精進努力する事が求められるわけです。そんな素晴らしい草鞋を作る為には、材料一つを選ぶにしても、何でも良いという訳にはいきません。どういう所に生えている藁が良いだろうかという場所選びから始まって、その藁の乾燥の仕方や編み方などにも、細かな工夫の余地は、数え切れないほどあるはずですよ。

また、藁を手にして実際に編んで行く時の力の入れ加減にしても、ただきつく絞めれば良いというものではなく、草鞋の部位によって、微妙に固さの違いが求められるかもしれません。また地面に接する面と、足の裏に当たる面とでは、やはり違う固さが求められるかもしれないし、鼻緒の部分も、適度な柔軟性と丈夫さが求められる事でしょう。また、鼻緒のすげ替えやすさも求められるかもしれません。

最近では大きな靴屋さんにはフットファイターという専門職の人がいて、一人ひとりのお客さんの足の形を調べ、夫々に合った靴選びのアドバイスなどをしてくれるようですが、昔の草鞋にしても同じ事がいえるのではないのでしょうか。できれば履く人、すなわち駕籠かきさん一人ひとりの足の大きさや形に合わせ、微妙にサイズや形を変え、夫々の足に合うものを作る事が出来れば、なお素晴らしい草鞋屋さんとして重宝がられ、喜ばれる事でしょう。

このように草鞋ひとつを作るにも、様々な工夫があり、努力があり、最高の草鞋作りを目指し日々精進努力しながら、その一生を草鞋作りに捧げたとしても、「今までに、『これこそが、最高の草鞋である』といえるような草鞋などは、一足たりとも作れなかった。自分はまだまだ努力が足りない」という様な事を言う草鞋屋さんこそが、最高の草鞋屋さんではないかという事です。

最高の駕籠かきとは、

同様の事は、駕籠を担ぐ人、即ち駕籠屋さんにおいてもいえます。草鞋屋さん、精魂込めて作ってくれたその草鞋を、無造作に履きつぶし、駄目になったら捨てれば良いという様なことではなく、その草鞋を大切に、如何にしたら少しでも長持ちさせられるだろうかと考え、履き方を工夫するのです。もしかしたら、その草鞋

は乾燥しきつた状態よりも、少し湿り気のある状態の方が、摩擦に強く、長持ちするかも知れませんが、或いは、そうではないかもしれませんが、色々と実際に試してみれば、どちらが良いかはすぐに分かるでしょうし、また、例えば同じ草鞋を履き続けるのではなく、何足か用意しておいて、交互に履き替える方が、長持ちさせる事が出来るかもしれません。

そして最高の駕籠かきとは、どんな駕籠かきだろうか考えるのです。どんな担ぎ方をし、どんな走り方をすれば、お客さんに喜んでももらえるだろうか日々考え、工夫し、最高の駕籠かきの姿を求め続け、目指していくのです。

駕籠を担ぐときの相方との呼吸の合わせ方や、リズムの取り方、そして道がカーブしている時のお客さんへの配慮や、登り道や下り坂でのスピードの取り方など、如何に乗り心地よくお客さんに満足してもらえんかの工夫をするのです。また当然の事ながら、急ぐお客さんかそうでないお客さんかによって、途中の休憩の取り方なども違ってくるでしょう。道の途中の名所旧跡などの勉強もしておけば、急がないお客さんの場合は、ガイドつきの素晴らしい駕籠屋さんという事になるでしょう。そしていつも安心して気持ちよく乗ってもらえるように、駕籠の掃除を怠らず、常に清潔を旨とし、楽しい旅をしてもらえるように、様々なところで細かい配慮をする事も必要でしょう。

料金も出きるだけ安くさせてもらい、目的地に着いたお客さんから「有り難う」と言ってもらった時は、「いえいえ、こちらこそ有り難うございました」と笑顔で応え、「乗り心地はいかがでしたでしょうか?」と聞き、もしも注意を受けるような事があれば、もっと良い駕籠屋さんになるために、喜んでその注意に耳を傾けなければなりません。

お客さんに感謝をし、履き心地の良い草鞋を作ってくれた草鞋屋さんに感謝をし、相棒の駕籠かきさんにも感謝をし、そして、駕籠を担いで走れる丈夫な体に生んで育ててくれた親にも感謝します。そして今のこういう生活を支えてくれる奥さんの気遣いに感謝をし、明日もまた元気で働ける自分自身の体にも感謝するのです。勿論、翌日の仕事の事など忘れてしまつての徹夜のかげごと等は論外で、

自分自身の健康管理も怠りません。

そのようにしながら最高の駕籠かきを目指し、しかし、どこまで行っても最高の駕籠かきになれない我が身を思い、常に謙虚さを忘れず、「もっともっと、まだまだ」の生活を楽しく送るのです。

こういうような駕籠かきさんこそが、最高の駕籠屋さんではないかと思えます。

一番難しいのは、良いお客さんの役

そして最後に出てくるのが、駕籠に乗る人、いわゆるお客さんです。

多分、今まで出てきた草鞋屋さんや駕籠かきさん達に比べ、この世的には恵まれた身分の人でしょう。地位やお金もあつて、お金さえ払えばどこでも行きたい所へ運んでもらえるわけですから、本来ならば、一番感謝しやすい立場にいる人です。勿論そのお金を得るためには、それなりの努力や精進をしたという場合もあるでしょうが、自分では大した苦勞もせずに、親代々の財産で裕福な生活をしているような人もいます。

そういう人達は、本来ならば感謝できる環境にありながら、なかなか感謝するという喜びの多い生活をする事がしにくいようです。感謝どころか下手をすると、横柄な態度になつて、駕籠かきさんに対して上からの命令口調で指図をし、その走り方が悪いの、担ぎ方が気に食わないのと、文句ばかりを並べ立て、揚句の果てに、お金を払う段になつて、それらを口実に値切つたりもするかもしれせん。

世の中は、なぜか一番恵まれている人が、一番感謝できにくいというところがあるようで、どちらかというと、貧しい生活をしている人の方が、少しの事でも大きな喜びを感じる事が出来るようです。

しかしそんな中にあつても、自分の事、そして世の中の事を本当に知っているお客さんなら、金銭的にどんな豊かな生活をしている人であつても、そんな鼻持ちならないお客さんにはならないはずで「実るほど、頭を垂れる稲穂かな」のことわざ通り、そういう人は、常に謙虚さを忘れません。そして例えば、目的地まで一刻も早

く着きたいのだと頼んでいたとすれば、「そんな私の勝手な願いを聞き入れて、途中疲れただろうに休みも取らず、一生懸命に走つてくれて、本当にありがとう。これは私の感謝の気持ちです。少ないけれど、これでお茶でも飲んで下さい」と言つて、ねぎらいの言葉と共に、約束以上のお金を払うかもしれません。そういう様な素晴らしいお客さんを目指せと平井先生は教えられたわけです。

どんな立ち場であつても

「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」の言葉は、どんな場合にも置き換えて言うことの出来る言葉です。今ならさしずめ、電車に乗る人と、その電車を運行する会社、そしてその電車を作るメーカーさんという事になるでしょうし、そしてまた外食する人とそのお店で働く人々、そしてそのお店に食材などを収める業者や生産者の方々という様に置き換える事もできます。駕籠に乗る人のこの言葉はどんな分野、どんな立場の人にも置き換えていう事ができます。

今は昔と違つて正規と非正規などの新たな問題もありますが、与えられた仕事がどのようなものであつても、またどのような立場であつても、その仕事や立場の中には、様々な工夫や発見の余地があり、そしてまた、どんな仕事や立場の中にも、様々な喜びや悲しみがあり、涙も笑いもあるのです。

自分に与えられた立場や仕事、どんなものであつても、その与えられた立場の中で、最高の仕事をし、最高の自分を表現できるように取り組む事ができる人は、仕事の中身に関係なく、仕事を通じて自分が高められ、自分を磨ける人です。そしてそういう人は、自分は勿論の事、接する人を幸せにする事ができる人です。

仕事や立場の中で常に相手の事を思つて、相手の喜びを我が喜びとし、そして自分を支えてくれる全てに対し、心から感謝をし、明るく努力し、工夫をし続けるような人は、仕事の中身に関係なく、仕事を通じて喜びを見出せる素晴らしい人です。

こういう人とは反対に、与えられた立場や仕事に対し、「自分には

もつと向いた仕事がある筈だ」とか、或いは「こんなつまらない仕事は、熱心に取り組むほどの価値が無い」などと言ったり、「自分への評価が不当に低い」などと言う人がいます。そういう人は、他のどんな仕事や立場を与えられても、その中からやはり愚痴や不平、不満を見つけて出して言うものです。そういう人はどんな小さな仕事の中にもある喜びを、即ち工夫する喜びや、ものを作り出す喜びを感じる能力が不足しているのではないかと考えられます。

我を忘れ仕事に没頭する楽しさも、より良いものを作りだす純粋な喜びも、より能率的・効率的に仕事を行うための工夫する喜びも知らず、「もつと自分は認められて良いはずだ」等という様な事を臆面もなく言う人に限って、たとえ新たな状況に置かれたとしても、やはり感謝することは少なく、愚痴や不平不満が多いのです。

私達は、どんな中からも喜びを見出す事もできれば、不幸を見出す事も出るので。要は、すべて自分次第です。

立場の中に使命がある

私達には誰にでも、生まれながらにしての使命というものが必ずあります。使命のない人などという人は、絶対におりません。生まれて来たという事は、使命があるという証拠です。

そしてその使命は、自分に与えられた今の立場や、今の仕事の中にあるのです。仕事や立場に誇りを持って、仕事を通じ、また立場を通じて、いかに自分を磨き、そして人に喜んでいただける自分になるかを模索する事です。

今の仕事や立場に不足不満を抱いて、それらをおろそかにする人は、たとえ自らが求めて他の仕事や立場に就いたとしても、やはり、それを楽しむ事が出来ず、悶々とする事が多いのです。

今の仕事に喜びを見出し、生き生きと仕事に取り組んでいる人は、自らそれを意識的に求めなくても、その人の能力をより大きく発揮できる場が与えられる事が多いようです。その時には必要とされる自分であることに感謝して、捉われを外し、より多くの人の喜びに繋がる道に進めばよいと思います。

目の前の仕事を心から楽しんでる人には、より大きな楽しみごと(一)の場合は仕事上の楽しい事が、集まってくるし、仕事を苦し

んで避けようとする人には、もつと大きな仕事上の苦しみが集まってくるのです。

今、自分の目の前にあるその仕事、そして自分の置かれたその立場というのは、本当に深い意味があつて理由があつて、数限りない仕事や立場の中から必然的に自分に与えられているのです。過去から生き続けている自分にその必要と目的があつて、無意識の自分が深いところで自分の為に自分で選んだ仕事であり、立場であり、道であるのです。

ですからあの素晴らしい草鞋屋さんや駕籠屋さん、そして行き届いた気配りのできるお客さんのように、自分がどんな立場に置かれても、常に最高の自分を目指し、その立場になり切る事が必要です。

草鞋を作る時は、草鞋作りになり切り、駕籠を担ぐ時は、最高の駕籠かきになり切り、駕籠に乗る時は、最高の良いお客さんになり切る様に努めるという事は、あの江戸時代の白隠禅師が、「悟りとは何ですか」と聞いた魚屋さんに対し、「悟りとは、最高の魚屋さんになる事だよ」と言ったのと同じです。また、NHKの金光先生に、「悟られても、心臓病で痛い時には、やはり痛いのでしょうか?」と聞かれた平井先生が、「痛い時には、痛いになり切る」と応じられましたが、何ごとであれ、なりきれば、それは仏の姿です。

「もとこちら、極めきつたら 菩薩なり」(けんじ)



(一)案内

十月の勉強会は、十月八日(土)午後七時からです。次回は、十一月十二日(土)を予定しています。皆様のご参加を、お待ち致しております。勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。編集発行人 もとはこちら会 資料編集部 北原友也

HP <http://www.motoha-kochira.com>
 mail: data3@motoha-kochira.com
 TEL 073・461・6300